

国語科学習指導案

指導者 京都市立修学院第二小学校 小野 賀代

1.日 時 平成20年9月8日(月)第5校時

2.学年・学級 第2学年い組(29名)

3.単元(教材) だいじなところに気をつけて読もう

サンゴの海の生きものたち もとかわ たつお

4.単元でつけたい力

生き物たちのかかり合いについて、説明の順序に気をつけて読むことができる。

語や文のまとまりや内容を考えながら声に出して読む。

5.単元計画 (関/2,話/1,書/1,読/6,言/1,全11時間)

時	その時間につけたい力	評価規準(評価資料)	観点
1	言葉になじむ力	本文や写真をもとにして難語句の大体の意味をとらえられている。(発言)	言
2	読みのめあてをつかむ力	「かかり合っくらす」とはどうかことか自分なりの考えがもてている。(発言・ワーク)	関
3	書かれていることの大体を読み取る力	ペアの生き物たちがどんなにかかり合いをしているか、自分なりに読み取ったことを書いたり、動作化できている。(動作化・ワーク)	読
	叙述に沿って読み取っていく力	イソギンチャクとクマノミ、大きな魚がしていることを、文章に合わせて動作化する。(動作化) 叙述に沿った動作化になるような助言が出来ている。(発言) イソギンチャクとクマノミのかかり合いでわかったことを書く。(ワーク)	読
5	読み取ったことをまとめて伝える力	イソギンチャクとクマノミがどのようにかかり合っているかを自分なりにまとめ、アイデアを出し合って班で台本を作り発表する。(動作化)	読
6	叙述に沿って読み取っていく力	ホンソメワケベラと大きな魚それぞれがしていることを、文章に合わせて動作化する。(動作化) 互いに不足しているところを補い合いながら叙述に沿った動作化をしている。(発言・動作化) ホンソメワケベラと大きな魚のかかり合いでわかったことを書く。(ワーク)	読
7	読み取ったことをまとめて伝える力	ホンソメワケベラと大きな魚がどのようにかかり合っているかを自分なりにまとめ、班で台本を作り発表する。(動作化)	読
8	進んで学ぼうとする力	ビデオを見て海の生き物への興味を深めたり、他の生き物どうしのかかり合いに気付いている。(ワーク)	関
9	要点をおさえて読む力	生き物のかかり合いに着目して本を読んでいる。(観察)	読
10	読み取ったことをまとめて書く力	海の生き物の特徴やペアの生き物たちのかかり合いを自分なりに読み取っ	書

		てまとめ、文章に書いている。(カード)	
11	読み取ったことを伝える力	カードを見せながら、海の生き物の紹介をしたり、ペアの生き物のかかわり合いを詳しく伝える。(観察)	話

単元構想

言葉の意味を調べよう、考えよう。

「かかわり合ってくらす」とは、どういうことかな。
自分の考えを、もとう。

ペアの生き物たちはどんなかかわり合いをしているのだろう。
よく読んで、考えよう。

文章にあわせて、体を動かそう。
イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読んでいこう。

イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを劇にしよう。

文章に合わせて、体を動かそう。
ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを読んでいこう。

ホンソメワケベラと大きな魚のかかわり合いを劇にしよう。

海の中の生き物のくらしを見てみよう。

～本に親しむ～生き物の本を読もう。

「生き物カード」を書こう。
・かかわり合って生きている、生き物たちのこと。
・はじめて知ったこと。
・不思議に思ったこと。

カードの紹介をしよう。
かかわり合って生きている生き物は、いたかな。

第 4 時の展開

	指導者	学習者	評価と個別の支援
	発問 指示	活動 ・ 応答	評価 支援
つかむ	<p>全文を通読する。</p> <p>ペアの生き物たちは、一緒に何をしていましたか。</p> <p>今日のめあてをみんなで言いましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・イソギンチャクとクマノミは一緒に守り合っていた。 ・ホンソメワケベラと大きな魚も助け合っていた。 <p>本時のめあてをつかむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章に合わせて体を動かそう。 ・イソギンチャクとクマノミのかかり合いを読んでいこう。 	
学ぶ	<p>三・四段落に書かれているイソギンチャクとクマノミの様子を読みましよう。</p> <p>イソギンチャクとクマノミの特徴は何ですか。</p> <p>書かれていることを動きで表しましよう。</p> <p>五・六段落に書かれているイソギンチャク、クマノミ、大きな魚の様子を読みましよう。</p> <p>書かれていることを動きで表しましよう。</p>	<p>それぞれの特徴が書かれているところに線を引きながら読む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・イソギンチャクにはしよく手と毒の針がある。 ・クマノミの体はねばねばの液でおおわれている。 <p>代表の班が出てきて動作化を発表する。 ナレーター役と演技をする児童に分かれる。 叙述に沿って動作化したり、説明をしたりする。 見ている児童は他の班の動きを見ながら、不足していることを補ったりまとめたりしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゆらゆらしている感じが出るように、手をゆらしたらいいと思う。 ・クマノミが浮かんでいるように見えません。 <p>自分が大事だと思う言葉に線を引きながら読む。</p> <p>イソギンチャク、クマノミ、大きな魚の動作化を班で考える。 叙述に沿って動作化したり、説明をしたりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな魚はもっと怖がった方がいいです。 ・敵がやってきたぞ。カチカチ。 	<p>叙述にあった動作になっているか文章を意識しながら動作化をするように助言。動作に説明をつけてもよいことを伝える。</p> <p>イソギンチャクとクマノミそれぞれがしていることを、文章に合わせて動作化している。(動作化) 叙述に沿った動作化になるような助言が出来ている。(発言)</p> <p>イソギンチャクとクマノミ、大きな魚がしていることを、文章に合わせて動作化している。(動作化) 叙述に沿った動作化になるような助言が出来ている。(発言)</p>

<p>ふり返る</p>	<p>イソギンチャクとクマノミのかかわり合いってどのようなものでしょう。</p>	<p>イソギンチャクとクマノミのかかわり合いでわかったことを書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・互いに守り合っている。 ・なかよし。 ・家族みたい。 	<p>イソギンチャクとクマノミのかかわり合いでわかったことを書いている。(ワーク)</p>
-------------	--	---	---

6. 板書計画

<p>たがいにまもり合うこと</p>	<p>イソギンチャクとクマノミのかかわり合いとは？</p>	<p>海の中の背景図</p>	<p>サンゴの海の生きものたち</p> <ul style="list-style-type: none"> 一・文しように合わせて体をうごかそう。 二、イソギンチャクとクマノミのかかわり合いを読んでいる。
--------------------	-------------------------------	----------------	---

授 業 者 省 察

京都市立修学院第二小学校 小野 賀代

1. 単元構想

サンゴの海に住む魚やイソギンチャクを、実際に自然の中で目にしたことのある児童は少ない。その意味で、本教材は児童の日常から離れた世界のことではあるが、自然や生きものが大好きな多くの児童が親しみや興味を持って取り組める内容になっている。児童は本教材を読むことで予想外の新しい発見ができる。文章中には難語句や普段の生活では使わない用語もたくさん出てくるが、まずは説明文を読む喜びを実感しながら読み進めることを大切に、本教材がきっかけとなって、説明文を自ら進んで読むようになってほしいと考えている。ただし、これまでに読んできた説明文に比べ、本教材は説明がやや複雑になっている。登場する生き物の数も多く、生きものの相互関係も入り組んでいる。「たんぼぼのちえ」では対象が「たんぼぼ」のみで単一、全体を時間の流れの順序で説明、文章全体のまとめはあるが、問いかけはない構成だったが、「サンゴの海の生きものたち」では対象が二組四種以上の生き物にわたり、時間の流れではなく「具体例 1」「具体例 2」を並列の関係で説明、文章全体への問いかけとまとめがある構成になっている。児童が説明の中心的な事柄を見失わないようにするために、何と何が主要なものなのかをきちんと見分けさせることが必要である。「初め・中・終わり」のなかの「初め」の記述を丁寧に読むことで、読み進め方の方向づけをし、おおまかに「初め」と「終わり」、さらには「中 1」「中 2」という文章構成を把握させ、確実に説明文を読む方法を身に付ける第一歩とした。

2. 研究主題との関連

研究主題「確かに読む 豊かに読む ～『つきたい力』から始まる国語学習～」において、本単元では「かかわり合い」に着目した読みを深める学習の展開をすることにした。「かかわり合い」をキーワードにどんな生きものたちが、どのような関係をもって生きているかを読んでいく。しかし「かかわり合い」つまり「共生」を文章だけから読み進めていくことは児童にとっては難解であるので、動作化をふんだんに取り入れる。まず文章を読み、自分達がイソギンチャクやクマノミなどになって体を動かしたり劇化したりする。本単元は登場する生き物がたくさんいるので、どの生き物がどんな行動をするかを文章から読み取っていないと正しく動作化できない。これまでも動作化を取り入れた学習はしてきたが、本単元では「正確に動作化」するようにさせたい。そのため、子どもたちが互いの動作を見て助言をし合いながら、生き物の特徴や、生きものどうしの関係を正しく動作に表わせるように学習を進める。いろいろに体を動かしたり何度も文章へ立ち返ったりしながら、その動きが叙述にあっていくかを確かめるなかで、児童は生き物たちの「守り合っている」「助け合っている」関係を文章からもつかんでいくと考える。これらの学習は中学年の「要点」の把握や「段落」意識の形成、説明文の表現方法を生かして再構成できる力につながる。説明的文章は児童の知的好奇心をおおいに働かせる。児童は教科書の文章との出会いをきっかけに起きてきた新たな疑問を解決するための情報や、ほかの生きものとの関係についても知りたいという思いをいだきださう。読むことの学習を生かし、説明文に書いてまとめる力をつけるために、地域の図書館から海の生き物の本を集めていつでも読めるようにしておく。そして自分の驚きやなるほどとおもったことなどを「生きものカード」に書いてまとめる活動もしていく。

3. 実践からの省察

本単元ではデジタルブックの映像を使って導入をした。映像を通してではあるが、イソギンチャクの中でゆらゆらと泳ぐクマノミや、大きな魚の口の中へ自ら入っていくホンソメワケベラの様子を見て、児童は教材への学びの意欲を高めていった。

授業後の反省や事後研究より

- ・ 4 月より成長した姿が見られた。友達の発表も互いに聞き合えるいい雰囲気だった。
- ・ 動作化は児童全員に経験させた方がいい。
- ・ 動作をしている子どもたちはがんばっていたが、見ている側の子どもたちに「いいところを見つけよう」とする強い思いが感じられなかった。「見比べる力」をつけることが今後の課題。
- ・ ワークシートに書けていない子が多かったのは言葉にこだわっていたからだろう。
- ・ 教科書の文章を読み替えて、自分の言葉にして書くという活動は今の段階の児童には難しい。

- ・難語句も、児童は工夫して動作化したりセリフで表わしたりしていた。読み取る力がついてきている。

本時の授業では、代表の子ども達の動作を見ながら、みんなで読みの不足している所を補ったりまとめたりして検討していく形にした。文章の叙述に着目させるために、あえて動作化に関わる児童数を限ったのだが、座っている子ども達からは考えていた以上に言葉での助言がでなかった。多くの子ども達が「自分もやってみたい。」「自分ならこうする。」と、動作でアドバイスをしていた。このことから、動作化をさせるときは、まず、みんなでやってみて、次に互いのいいところを見つけ合う場を設定し、サンプルをみつけてみんなに紹介することで質を高める方法をとっていくのがいいとわかった。教え合う・比べ合うという共同学習力をつけていくのが今後の課題である。